

漢字と文化

漢字文化の全き継承と發展のために

京都大學 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報學研究教育據點

第 9 号



目次

訳語から見えるもの	2
N か M か	5
清野謙次蒐集敦煌寫經の行方	9

訳語から見えるもの

井波陵一

中国語において稀代の名訳として知られるのは「可口可乐」(Coca-Cola)である。「ke kou ke le」と発音し、訓読すれば「口にす可し楽しむ可し」となるこの訳語は、さしずめ表意文字と表音文字を理想的な形で結合させた優等生と言えるだろう。ライバル会社は「百事可樂」と銘打ったが、商品としてのインパクトには格段の違いがあると言わざるを得ない。何と言ってもコーラは「口にする」ものなのだから。

会社名や商品名にどの漢字を当てるかということ



は、もともと漢字に縁のない外国企業にとっては文字どおり死命を制する課題であり、商品のイメージ戦略の一翼を担う重要なファクターである。民国期以降、我々はそうした事例を数多く見つけることができる。

もちろん外国の品物を漢字名としてどのように定着させるかは、別に商品に限ったことではないし、またアルファベットだけの問題でもない。ここではまず、日本語の「おでん」の翻訳を取り上げてみよう。周知のように、現在「おでん」には「熬点」の二文字が当てられている。発音は「ao dian」で、「おでん」と近い。「熬」はグツグツ煮るという製法を意味するし、「点」は「点心」にはかならない。コンビニエンスストアの販売戦略から生み出された当て字ではあるが、「おでん」の性質をうまく表した訳語になっている。それでは「熬点」以前、中国の人々にとって「おでん」がまだ身近な存在ではなかった時代に、「おでん」はどう訳されていたのだろうか。『溼東綺譚』に次のような一文がある。

突然、「降ってくるよ」と叫びながら、白い上ツ張りを着た男が向こう側のおでん屋らしい暖簾のかげにかけ込むのを見た。

謝延莊訳（『舞女』所収、四川文芸出版社、1988年）では、

突然有人大叫、「要下雨啦！」我一看，只見一個穿白色套褂的男子，一辺喊一辺向对面的菟菟豆腐雜燴店奔去。

譚晶華・郭潔敏訳（『地獄之花』所収、上海訳文出版社、1994年）では、

看到一個身穿白色工作服的男子突然叫了声「下雨啦！」然後跑進了对面那家壳豆腐芋頭的鋪子。

陳薇訳（『永井荷風選集』所収、作家出版社、1999年）では、

忽然看見一個穿着白色罩衣的男人一辺喊着「要下

雨啦」，一辺奔進対面雜燴店的布門簾裏。

「蒟蒻豆腐雜燴店」という訳語は、いきなりコンニャクとトーフが出て来るところから見て、「蒟蒻・豆腐・里芋・はんぺん・つみれなどを醤油味で煮込んだ料理」という『広辞苑』の説明を参照したと思われる。「売豆腐芋頭の舗子」では普通の豆腐屋か八百屋になってしまう。「雜燴」を強いて一語で「ごった煮」と訳す中日辞典もあるが、両者が喚起するイメージには明らかに異なる。増田渉あての書簡（1933年6月25日）の中で、魯迅は次のように言う。

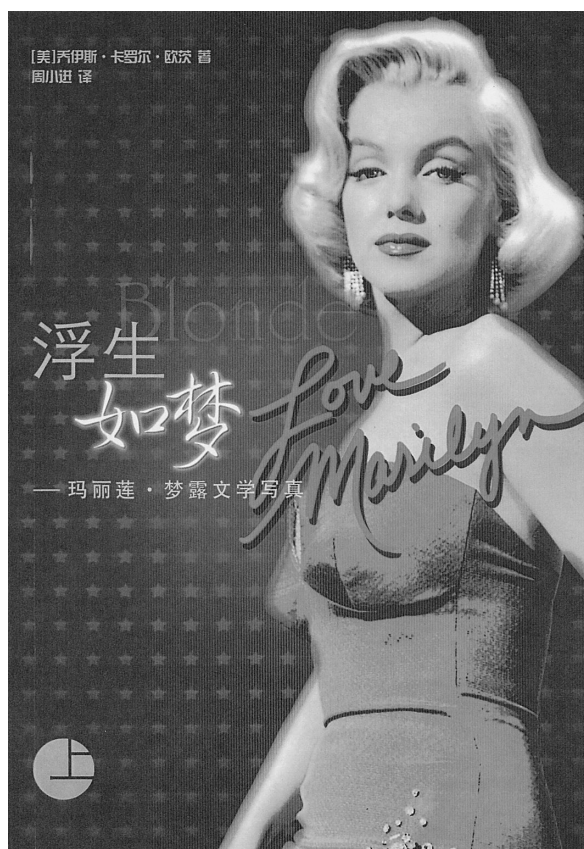
雜燴。種々なものを混雜して炒したもの、鍋のままに出さない。併し煮るとは違います。炒とは鍋に少量の豚油を入れて煮立たあとに材料を入れ、で二三十度迅速に攪動して皿に入れる。（原文日本語）

手元の漢英詞典を引いてみると、「雜燴」には mixed stew とか hotchpotch とかいう訳語が当てられている。「おでん」の場合には原語と訳語のズレを楽しめるからまだマシなのかも知れないが、すぐ後に出て来る「潰島田〈つぶし〉」ともなると、はっきり言って訳者に同情を禁じ得ない。もちろん、こうした苦労がお互いさまであることは言うまでもないが。

『英語人名詞典』で Monroe を引くと「門羅 (men luo)」であり、モンロー主義で有名な James Monroe は「詹姆斯・門羅」である。この二文字は音訳に過ぎない (Washington に「華盛頓」, Clinton に「克林頓」の三文字が当てられることにも別段深い意味はない)。しかし同じ Monroe という綴りででありながら、女優の Marilyn Monroe に当てられた二文字はこれ以外にあり得ない——瑪麗蓮・夢露 (meng lou)。説明の必要もないだろう。ちなみに「野生のエルザ」や「ロシアより愛をこめて」を歌った Matt Monro (最後の e はない) をインターネットで検索してみると、「麦特・蒙羅」となっている。『アーサー王の死 (Le Morte Darthur)』に登場する魔法使い Merlin を「魔霊 (mo ling)」と訳すのも、夢露に類すると言えようか (『亜瑟王之死』, 人民文学出版社, 2005年)。関連書名に目を転じると, Joyee Carol Oates の “Blonde: A Novel” は、「浮生如夢——瑪麗蓮・夢露文学写真」と訳されている (周小進訳, 人民文学出版社, 2003年)。「夢」の字を活かした例として「廊橋遺夢」が挙げられよう。『マディソン郡の橋 (The

Bridges of Madison County)』の訳語である。あの橋の形と物語の展開を、いかにも中国らしく四字句にまとめたところがうまい。この作品は中国でもヒットしたらしく、王秀盈『《廊橋遺夢》英文原著賞析』などという著作まで出版されている (世界知識出版社, 2001年)。

『巨匠とマルガリータ (Мастер и Маргарита)』は、管見に入ったものだけでも 4 種類の本がある。①『大師和馬格麗達』(王振忠訳, 中央民族大学出版社, 1996年), ②『撒旦起舞』(寒青訳, 作家出版社, 1998年), ③『大師和瑪格麗特』(錢誠訳, 外国文学出版社, 1999年), ④『大師与馬格麗特』(嚴永興訳, 訳林出版社, 2000年), である。使われた字に微妙な相違はあるものの、①③④は原題に忠実である。②は物語の内容に即したタイトルになっているが、「訳者簡介」によると寒青=嚴永興であり、②と④の訳文も同じであるから、翻訳としては 3 種類ということになる。④の嚴氏の序文は『撒旦起舞』のことにまったく触れていないので具体的な事情は分からない。ただこのタイトルは、ローリングストーンズの「悪魔を憐れむ歌



(Sympathy for the Devil)」が『巨匠とマルガリータ』に触発されて作られたという言い伝えを思い起こさせる。

『失われた時を求めて (À la recherche du temps perdu)』には「追憶似水年華」という訳語が当てられる(訳林出版社, 1989年)が, これは『論語』子罕篇の「子, 川の上に在りて曰く, 逝く者は斯くの如きか, 昼夜を舍かず」を踏まえているし, 林黛玉が『牡丹亭還魂記』の音楽を聴いて心を奪われる場面(『紅樓夢』第23回)なども必ずや想起されたことだろう。

『黒馬物語 (Black Beauty)』には1994年版の Penguin Popular Classics から訳出した『黒駿馬』と, 2002年版の Gramercy Books から訳出した『黒美人』があり, いずれも2004年に人民文学出版社から刊行されている。Black Beauty は牡馬だったと思うので, 黒駿馬はともかく, 黒美人と訳されると, いささか抵抗感がないでもない。「美人」に対する語感の相違があるのかも知れないが, 中国でも伝統的に「美人香草」と言われていることだし, この二文字が選ばれた理由はいまひとつよく分からない。

“Bonnie and Clyde” はもちろん「俺たちに明日はない」と訳されるはずもなく, 「邦妮和克萊徳」という単純な音訳である。“Butch Cassidy and the Sundance Kid” も, むろん「明日に向かって撃て」と訳されることはないが, 少しひねって「虎豹小霸王／神槍手与智多星」と訳されている。拳銃の名手サンダンスが「神槍手」, 「俺は頭が良すぎる」と自分で嘆くブッチが「智多星」であることはすぐに分かる(智多星と言えば『水滸伝』の軍師呉用である)。「虎豹」は Butch, 「小霸王」は Kid にちなんているか。ピーター・フォンダ主演の“Easy Rider”の場合, 日本ではカタカナ訳ですませているが, 中国語訳では「逍遙騎士」である。逍遙は高踏的な散策, 騎士はそれこそアーサー王を習慣的に思い浮かべてしまうので驚かされた。もっとも『朗文 (Longman) 当代英語大辞典』(商務印書館, 2004年)の“Easy Rider”は「拉皮条的人」と訳されており, 英和辞典だと「売春婦のひも」といった訳語に当たる。映画の中でJ・ニコルソン扮する酔っぱらい弁護士が, 「ふだん口先で自由, 自由と唱えるヤツらは, 本物の自由がやって来ると, それを恐れ憎む」といったようなことを述べていたが,

ワイアットとビリーをどう見るかという立場の違いが, 「逍遙騎士」と「拉皮条的人」という二つの訳語の間に横たわっているのかも知れない。それとも両者は貨幣の裏表の関係にあるのだろうか。

なお, 下に掲げたのは, Die Fondas. Ein Jahrhundert Hollywood by Andreas Kern の中国語訳『方達家族』(花城出版社, 2005年)の表紙である。この中でピーターの娘ブリジットは「碧姫」と訳されている。俳優という点から見れば, 音訳と職業イメージを調和させたこの2文字は, 亨利(祖父), 簡(伯母), 彼得(父)を羨ましがらせることだろう。



N か M か

安岡孝一

大阪のミナミに難波という駅がある。南海，近鉄，JRの始発駅がある上に，地下鉄が3路線も交差する一大ターミナルなのだが，駅名標を眺めていると不思議なことに気づく。どれもこれもローマ字が「Namba」と書かれているのだ。「な」が「NA」，「ば」が「BA」なのは間違いないから，「ん」が「M」で表記されているということになる。じゃあ，大阪の人間は「ん」をローマ字で「M」と書くのか，というと，そんなことはない。隣の駅の心斎橋は「Shinsaibashi」だから，「ん」は「N」だ。実際，地下鉄御堂筋線には「ん」の付く駅が7つあって，北から順に

- 新大阪「Shin-Osaka」
- 本町「Hommachi」
- 心斎橋「Shinsaibashi」
- 難波「Namba」
- 動物園前「Dobutsuen-mae」
- 天王寺「Tennoji」
- 新金岡「Shinkanaoka」

だから，本町と難波だけが「M」で，あとは全部「N」ということになる。御堂筋線以外の大阪市営地下鉄では，千林大宮，天満橋，堺筋本町，日本橋，新森古市が「M」で，野江内代，四天王寺前夕陽ヶ丘，住之江公園，弁天町，野田阪神，新深江，天下茶屋，トレードセンター前，ポートタウン西，ポートタウン東，南

港東，南港口が「N」。キワメツケが天神橋筋六丁目「Tenjimbashisuji 6-chome」で，2つの「ん」に対して「N」と「M」が両方使われている（ちなみに谷町四丁目，蒲生四丁目，瑞光四丁目は「4-chome」）。どうして，こんな妙なことになっているのだろう。



日本のローマ字の元祖は，横浜にヘボン塾を開設した James Curtis Hepburn (1815-1911) である。彼は『和英語林集成』^[1]という和英辞典を作るにあたり，日本語をラテン・アルファベットで表記することに挑戦した。この和英辞典は，英語を母語とする人々に向けて書かれたものだったので，日本語の見出しも全てアルファベット順に並べる必要があったのだ。この時，彼が用いたのが，日本語の音韻を英語の視点から分類して記述する手法であり，のちに「ヘボン式ローマ字」と呼ばれるものである（次ページ上図）。彼の説によれば，日本語の「ん」には3種類の音「ng」「m」「n」があるのだという。語末の「ん」は「ng」，バ行マ行パ行の音の直前の「ん」は「m」，その他は「n」ということだ。そう言われてみると確かに私自身，難波の「ん」は口をつむって発音するが，天王寺の「ん」では口が開いている。ただし「ヘボン式ローマ字」は，この「ng」「m」「n」をそのまま表記に用



aア kaカ saサ tuタ naナ haハ maマ yaヤ raラ waワ gaガ zaザ daダ baバ paパ
iイ kiキ shiシ chiチ niニ hiヒ miミ iイ riリ i井 giギ jiジ jiヤ biビ piピ
uウ kuク szス tsツ nuヌ fuフ muム yuユ ruル uウ guグ dzヅ dzyヂ buフ puフ
eエ keケ seセ teテ ne子 heヘ meメ yeエ reレ yeエ geゲ zeゼ deデ beベ peペ
oオ koコ soソ toト noノ hoホ moモ yoヨ roロ woワ goゴ zoゾ doド boボ poポ

いるわけではない。「m」はそのまま「M」を用いるが、「ng」と「n」はいずれも「N」で表記する。つまり、英語を母語とする人々は、「m」と「n」の違いには敏感だが、「n」と「ng」の違いはそんなに気にかけないので、それを反映した表記法となっているわけだ。なお、Hepburnは『和英語林集成』の第2版^[2]において、「ヘボン式ローマ字」に修正を加えており、たとえば「ス」「ツ」「ズ」はそれぞれ「SU」「TSU」「DZU」に表記を変更したが、「ん」はそのまま「N」と「M」で表記していた。

1885年にHepburnは、羅馬字会という団体から、ローマ字の標準的つづり方について意見を求められている。この年の1月に結成された羅馬字会は、日本語から漢字も仮名も追放して全てローマ字で書こう、という非常に先鋭的なスローガンを持つ団体だった。Hepburnは、そこまで先鋭的な考えを持っていたわけではなかったが、ローマ字の元祖という立場もあるので、会議の場において「ヘボン式ローマ字」の利点を述べた。そうしたところ羅馬字会は、この年の5月に出版した『羅馬字にて日本語の書き方』^[3]において、「ヘボン式ローマ字」をほぼそのまま採用し、羅馬字会における標準的なローマ字のつづり方としたのである。当然「ん」についても「m, b, pの前にはmを用ひ其外は皆nを用ふべし」と定めている。ところが、羅馬字会の会員の中には「ヘボン式ローマ字」に不満を持つ者がいた。その急先鋒が、田中館愛橘(1856-1952)だった。「し」「ち」「つ」を「SHI」「CHI」「TSU」と書くのは「無駄骨」^[4]だ、というのが田中館の考えだった。「SI」「TI」「TU」と書けばいいのだ。「ん」にしても「N」と「M」を書き分けるなどムダであり、全部「N」で押し通しても、日本語の音韻上、対立していないのだから何の不都合もない。英語音を真似するための「ヘボン式ローマ字」など、心得違いもいいとこだ。翌1886年1月、田中館は、この考えのもとづくローマ字のつづり方を羅馬字会の総会に提出するが、否決。その後、羅馬字会を脱会し

NAMASZ, ナマス, 膾, *n.* A kind of food made of raw fish.

NAMA-WAKAI, ナマワカイ, 生弱, Still tolerably young, not past maturity.

NAMA-YAKE, ナマヤケ, 生焼, Half baked, or roasted.

NAMAYE, ナマヘ, 名, *n.* Name. *Anata no onamaye wa nan to mōshimasz*, what is your name? Syn. NA.

NAMA-YEI, ナマエヒ, 酔客, *n.* Half-drunk, fuddled.

NAMBA, ナンバ, *n.* A kind of wooden boots worn by farmers in working in deep rice fields; also maize.

NAM-BAI, ナンバイ, 何杯, *How many times full? Midz wo — iremashō.*

NAM-BAN, ナンバン, 南蠻, (*minami no yebisz*). Southern barbarians; formerly applied to the Portugese, Dutch and other Europeans.

て、羅馬字新誌社、日本のローマ字社、日本ローマ字会などを次々に設立し、彼の考える「日本式ローマ字」を広めるべく運動を続けていく^[5]。

この結果「ヘボン式ローマ字」と「日本式ローマ字」は、勢力争いを始めてしまった。その有り様は、漢字追放という崇高な使命を忘れたかのような、まるでセクト間の内ゲバだった。鉄道の駅名標も、彼らの勢力争いの標的となった。1898年5月14日付の鉄道局長通達(鉄甲第288号)で、駅名標には「羅馬字ヲ併記スルコト」^[6]とされていたが、「ヘボン式ローマ字」なのか「日本式ローマ字」なのか明記されていなかったのだ。そこで両陣営は、自分達のローマ字を駅名標に採用させるべく、それぞれロビー活動を展開し、大正末期には鉄道大臣への建議合戦にまで発展した。1927年4月20日、鉄道大臣に就任した小川平吉(1870-1942)は、この混乱に終止符を打つべく、同年7月2日付の達571号で、駅名標のローマ字を「ヘボン式」と定めた^[7]。実は同年4月7日の達296号で「ヘボン式」の採用は決まっており、それを念押ししたのだ。もちろん「ん」は、「N」と「M」で書き分けることとなった。

1930年12月15日に発足した臨時ローマ字調査会^[8]は、「ヘボン式」と「日本式」の関ヶ原となった。「ヘボン式」の総大将は鎌田栄吉(1857-1934)、対する「日本式」の総大将は田中館愛橘、いずれもローマ字運動45年の重鎮だ。ところが実際の議論になると、田中館に比べて鎌田はイマイチ迫力がない。田中館は「日本式」の考案者であり、理論的な裏付けを自分自

◎内閣訓令第3號

各官廳

國語ノローマ字綴方ハ從來區々ニシテ、其ノ統一ヲ缺キ使用上不便尠カラズ、之ヲ統一スルコトハ教育上、學術上將又國際關係其ノ他ヨリ見テ、極メテ必要ナルコトト信ズ。仍テ自今左ノ通ローマ字綴方ヲ統一セントス。各官廳ニ於テハ漸次之ガ實行ヲ期スベシ。

昭和十二年九月二十一日

内閣總理大臣 公爵 近衛 文麿

一、國語ノローマ字綴方ハ左表ニ依ル

ローマ字綴表

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	i	yu	e	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	i	u	e	o			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	zi	zu	de	do	zya	zyu	zyo
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

二、前號ニ定ムルモノノ外ニ付テハ概ネ左ノ例ニ依ル

一 長音ノ符號ヲ附スル場合ニハ okāsama, kūsū, Ōsaka ノ如ク「ー」ヲ用フルコト

二 撥音ハ總ベテ「ン」ヲ以テ表ハスコト

三 撥音「ン」ト其ノ次ニ來ル母音(「ア」含ム)トヲ切離ス必要アルトキハ hin-i, kin-yōbi, Sin-Okubo ノ如ク「ー」ヲ用フルコト

四 促音「ッ」ガ kōkō, happyō, tossa, Sapporo ノ如ク子音ヲ重ネテ之ヲ表ハスコト

五 文書ノ書始及固有名稱「 Wagakuni no……, Sizuoka, Masasige ノ如ク語頭ヲ大

文字トスルコト尙固有名稱以外ノ名稱ノ語頭ヲ大文字トスルモ差支ナシ

六 特殊音ノ表記ハ自由トス

身で構築できたが、「ヘボン式」の考案者は Hepburn であって、鎌田はそれを使ってきたに過ぎない。それが迫力の差となって現れたのだ。さらに不幸なことに鎌田は、1934年2月6日にあつてなくこの世を去ってしまう。「ヘボン式」側は新たに門野幾之進(1856-1938)を立てるが、もともと旗色が悪かった上に、総大将の交代とあっては圧倒的に形勢不利。結局1936年6月26日、「日本式」の完全勝利で、臨時ローマ字調査会は幕を閉じる。これを受けて1937年9月21日、内閣訓令第3号^[9]いわゆる「訓令式ローマ字」によって、ローマ字のつづり方が統一された。鉄道省もこれには逆らえず、翌年から順次、駅名標のローマ字を「訓令式」に変更していった。「ん」は全て「N」で表すことになったのである。

ところが日本の敗戦によって、この状況は大きく変化する。1945年9月3日(すなわち降伏文書調印の

翌日)、GHQは駅名標に「ヘボン式ローマ字」を表示するよう要請^[10]した。そもそも太平洋戦争中は、駅名標からローマ字がほぼ抹消されていたので、それを「ヘボン式ローマ字」で復活せよ、という要請だったのである。運輸省は即座にこれにしたがい、さらに翌1946年4月1日の運輸省達第176号『鉄道揭示規程』で、駅名標での「ヘボン式ローマ字」の使用を明文化した。「ん」は再び「N」と「M」で書き分けることになったのである。一方、文部省は、「ヘボン式ローマ字」に対して微妙に抵抗を続けた。ローマ字教育協議会、ローマ字調査審議会準備会、ローマ字調査審議会などを設置したものなかなか成案を出さず、審議をさらに国語審議会に移して、1953年3月12日にやっと『ローマ字のつづり方』を決定したのである。1954年12月9日に内閣告示された『ローマ字のつづり方』^[11]は、「訓令式ローマ字」を基本とするもので、そこ

に「ヘボン式ローマ字」が追加されたものだった。つまり、どちらも OK という玉虫色の解決となったのである。ただし、「ん」に関しては全て「N」であり、「M」は許されていない。この点において『鉄道掲示規程』のローマ字は、『ローマ字のつづり方』に微妙に反するものとなってしまったが、特にこれを是正する動きもなく、現在に至っている。

しかし、その後に現れた「ローマ字仮名漢字変換」によって、ローマ字の運命は大きく変わっていく。1980年12月に発売された『キヤノワード55』は、「ローマ字仮名漢字変換」を最初に搭載したワードプロセッサであり、「訓令式ローマ字」と「ヘボン式ローマ字」の両方をサポートしていた^[12]。たとえば難波は、「namba」でも「nanba」でも変換可能だった。これ以後、ほとんど全てのワープロやコンピュータが「ローマ字仮名漢字変換」をサポートするようになっていったが、それらはいずれも「訓令式」と「ヘボン式」の両方をサポートしていた。ただ、「ん」に関しては別で、「m」のサポートは徐々に減っていき、代わりに「nn」をサポートするものが増えていった。2000年1月に制定された日本工業規格『仮名漢字変換システムのための英字キー入力から仮名への変換方式』^[13]では、「m」の「ん」はオプションとなり、「nn」が「ん」に規定されてしまった。すなわち、「namba」は「な m ば」に、「tennoji」は「てんおじ」に変換されるのが、標準の実装だ。つまり「ん」は、「n」でも「m」でもなく、「nn」になってしまった。「訓令式ローマ字」でも「ヘボン式ローマ字」でもない「仮名漢字変換用ローマ字」が、もはや標準となってしまったのだ。漢字追放の先鋒を担うはずだったローマ字は、「ローマ字仮名漢字変換」によって骨抜きにされてしまい、結局、漢字の下僕とされてしまったわけである。

トミー、「N」も「M」も、もうここにはいないの。いるのは「NN」だけなのよ。それもこれも漢字のせいね。

[1] J. C. Hepburn: A Japanese and English Dictionary, American Presbyterian Mission Press, Shanghai (1867).

[2] J. C. Hepburn: A Japanese-English and English-Japanese Dictionary, Second Edition, American

Presbyterian Mission Press, Shanghai (1872).

- [3] 羅馬字にて日本語の書き方, 羅馬字會, 東京 (1885年5月18日)。
- [4] 田中館愛橘: 本會雜誌ヲ羅馬字ニテ發兌スルノ發議及ヒ羅馬字用法意見, 理學協會雜誌, 第16卷 (1885年8月), pp.105-132.
- [5] ローマ字運動110年のあゆみ, Rômazi Sekai, No.624 (1995年4月), pp.0-44.
- [6] 中橋徳五郎: 旅客ノ便益ノ爲メ揭示其他ノ事項實施方ノ件, 鐵道法規類抄 (1904年11月28日), pp.87-88.
- [7] 小川平吉: 鐵道揭示例規, Rômaji, XXII no Maki, Dai 11 Gô (1927年11月), p.202.
- [8] 臨時ローマ字調査會議事録, 臨時ローマ字調査會, 東京 (上1936年3月31日, 下1937年3月31日)。
- [9] 近衛文麿: 内閣訓令第3號, 官報, 第3217號 (1937年9月21日), p.567.
- [10] 驛のローマ字復活, 朝日新聞, 第21370号 (1945年9月7日), p.2.
- [11] 吉田茂: 内閣告示第1号, 官報, 第8382号 (1954年12月9日), p.189.
- [12] 竹中駿平, 坂内祐一, 細川寿子: 英文キーボードによる日本文入力について, 日本文入力方式研究会資料, 1-1 (1981年10月21日)。
- [13] JIS X 4063:2000 仮名漢字変換システムのための英字キー入力から仮名への変換方式, 日本規格協会, 東京 (2000年1月20日)。

清野謙次蒐集敦煌寫經の行方

高田時雄

大阪のF氏から家蔵の資料中に狩野直喜、濱田耕作、羽田亨など昔の京都大学の先生方の筆跡がかなりあるが、興味があるかというご連絡を頂き、幾つかのサンプル画像を送っていただいた。中には少し不鮮明なものもあったので、それではいっそのこと直に拝見しようというので、一日F氏宅にお邪魔して御所蔵の品々を見せていただいた。F家は清野謙次博士の後裔である。清野家は後嗣に恵まれず、實弟に当たる方を養嗣子として迎えたが、男子がなく、結局女系のF家で清野博士の遺品を受け継いでいるとのことである。

清野謙次（1885～1955）は病理学、人類学、考古学など幅広い分野に極めて多彩な業績を残したユニークな学者であった。1921年京大医学部教授となり、翌年生体染色研究の業績に對して帝國學士院賞を受けている。1938年、故あって京大教授を辭職、やがて東京に居を移し民間の學者として活動した。非常に収集家であり、自らの研究材料として生涯に集めた資料は極めて大量に上るが、それらのうち日本各地の遺蹟から出土した人骨は京都大学自然人類学研究室に、考古民俗資料は大阪府立近つ飛鳥博物館に、藏書は東京大学や天理大学などにそれぞれ安住の地を見出している。

清野は典籍の筆寫を趣味とした。天性の筆忠實によって書き寫された書物は、現在F家に残されているものだけでも、記紀萬葉、風土記など日本のものから、孝經、孟子、三略六韜等々に至るまで相當數ある。丁寧な楷書で作られた寫本はみな立派な装本が施され、鮮やかな水莖の跡を今に留めている。清野はまた交遊のあった名家に揮毫を求めて楽しむのが常であったようで、F氏の作成されたリストによれば、高橋は清、西園寺公望から与謝野晶子まで、その數は總計141名に及ぶ。狩野、濱田、羽田等諸教授の文字もそれらの一部というわけである。こうした名家の筆跡が寫本の諸處に散りばめられているのを逐一見ていくだけでも、

興味が盡きない。直ぐに退散する積もりが、結局夕刻まで居座ってしまい、定めしF氏も迷惑と思われたことであろう。

さてこの書寫趣味の行き着くところ、天性の蒐集癖も相俟って、清野は前後して古寫經の蒐集に極めて大きな情熱を注ぐようになる。なかでも當時最も貴重視された敦煌寫經についても、可成りな數量を所藏していたことが知られている。戦前の京都で、敦煌寫經のコレクターと言えば、先ず守屋孝藏に指を屈せねばならないが、そのコレクションは現在すでに京都國立博物館に収まり、立派な圖録も公刊されている。しかし清野コレクションについては、その行方についてよく知られていなかった。およその憶測は不可能ではなかったが、確實な證據がなかった。今回、偶然のきっかけで、その憶測を確認し得る材料を得たので、それを簡単に報告しておきたい。

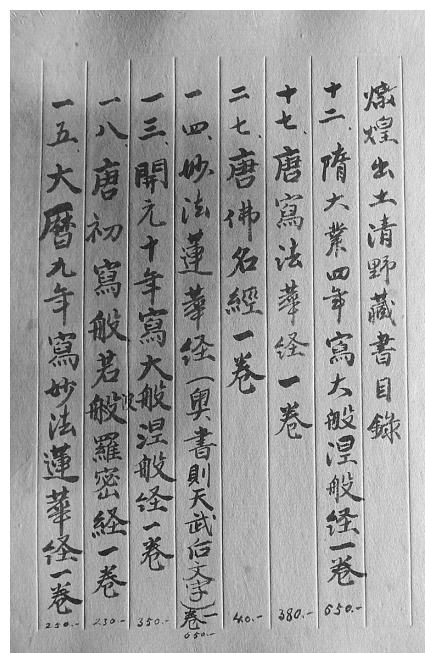


図1：「敦煌出土清野藏書目錄」（部分）

敦煌寫本研究者にとって座右の書である商務印書館編『敦煌遺書總目索引』^(注1)の「四、敦煌遺書散録」には、その第13として「日本諸私家所藏燉煌寫經目錄」が掲載されており^(注2)、その末尾に清野謙次の藏品19点が見える^(注3)。この「日本諸私家所藏燉煌寫經目錄」は同處にもはっきりと明記してあるように『昭和法寶目錄』第一卷（1929年8月刊行）所收の「燉煌本古逸經論章疏并古寫經目錄」に據ったものである^(注4)。これが清野謙次の舊藏敦煌寫本に關する公刊された唯一の情報である。ところがF家には清野自筆の「燉煌出土清野藏書目錄」なるものが保存されていた（圖一）。實はこの目錄は昭和14年（1939年）10月27日、所藏の敦煌經卷を羽田亨に譲渡した時のものである。その數40卷（38卷と2冊）。『昭和法寶目錄』所收點數の倍以上となり、この10年間に清野が繼續して蒐集を行っていたことがよく分かる。一方、羽田の方もその蒐集した敦煌寫本の手控えを残しており^(注5)、その中に罫紙二枚に書かれた同一の目錄が含まれている。この目錄も清野の手になるものだが、末尾に清野と羽田が署名押印してあり、譲渡を取り決めた證文といった性格のものである。兩者には基本的な違いはないが、F家のものには各經卷それぞれの査定額が清野によって記入されている。以下がその目錄である。『昭和法寶目錄』所收のものには◎を附し、更に經名の前に「散録」の番號を記入して便宜を圖ることとする。各項最後の數字が査定額である。

燉煌出土清野藏書目錄

- ◎十二^(注6)、(1076) 隋大業四年寫大般涅槃^(注7)經一卷 650.-
 十七、唐寫法華經一卷 380.-
 二七、唐佛名經一卷 40.-
 ◎一四、(1082) 妙法蓮華經（奧書則天武后文字）一卷 650.-
 ◎一三、(1077) 開元十年寫大般涅槃經一卷 350.-
 一八、唐初寫般若波羅密經一卷 230.-
 ◎一五、(1078) 大曆九年寫妙法蓮華經一卷 250.-
 ◎一一、(1083) 隋開皇廿年摩訶般若波羅密經一卷 380.-
 ◎一六、(1081) 武成二年寫雜寶藏經一卷 750.-
 ◎三七、(1092) 律攝卷第五（唐咸通四年寫）一卷 185.-
 三八、唐時物價單殘紙（吐魯番出土）一卷 120.-
 二〇、唐寫比丘戒一卷 200.-
 二〇、唐寫比丘尼戒一卷 200.-
 三九、藏文無量壽名大藏經一卷外藏文經二卷合計三卷 150.-

- ◎三七五、(1080) 大梁貞明六年寫佛畫入佛名經二卷^(注8) 1000.-
 六一一、燉煌小斷片四種二軸 80.-
 ◎五四、(1086) 大般若經卷四九^(注9)、完全一卷 42.-
 ◎六〇、(1084) 大般涅槃經卷三三、完全元軸一卷 40.-
 ◎五九、(1087) 大佛頂經第一（完全、元軸）一卷 30.-
 ◎六一、(1094) 佛名經第五、一卷 105.-
 五八、四分律刪補隋機羯磨卷下一卷 40.-
 ◎五七、(1089) 摩訶般若波羅密經第三（六朝寫）一卷 56.-
 ◎五六、(1093) 佛說藥師經一卷 45.-
 五五、救諸衆生苦難經一卷 35.-
 四八、摩訶般若波羅密經、一卷（第十六） 40.-
 ◎五一、(1085) 妙法蓮華經卷六、一卷 40.-
 ◎五二、(1086) 大般若經九三卷、一卷 50.-
 五〇、佛名經卷十二、一卷 120.-
 ◎四九、(1088) 金光明最勝王經第五、一卷 65.-
 五三、大般若經三七（注10）、一卷 70.-
 四五、大般涅槃經卷廿一（完美）一卷 75.-
 四六、佛名經第一五、一卷 75.-
 ◎四七、(1090) 維摩經卷上一卷 80.-
 ◎番號不明、(1079) 華嚴經（六朝寫）一卷 100.-
 三七六、羅振玉舊藏燉煌經斷片折本二冊 150.-
 以上四拾卷（三八卷、二冊）

以上が目錄の本文で、その後以下の一文が書き添えられている。

右之目錄を現物に添へて京都帝大総長羽田亨氏に差出す事に決定す。（中略）現物に添へて別に目錄二通を差出し、受取りを貰ふ事とせり。

昭和十四年十月廿七日

これは先に觸れた羽田手控え中の譲渡契約書と完全に一致する。ちなみにその末尾部分には「以上四〇卷（三十八卷、二冊）」として目錄を書き終えた後に次ぎのように記されている。

右之通りに有也
 昭和十四年十月廿七日
 清野謙次（押印）
 右之通り御願致候也
 羽田 亨（押印）

再度F家の資料に戻ると、上の一文に續けて、以下のような領收書の寫しが書かれている（圖二）。

右の書籍賣れたるに就き、左の領收書を渡せり。
 領收書
 一金 八仟五百円也
 右 燉煌出土書類四拾卷（三十八卷二冊）之代

價として正に領收仕候也。

昭和十四年十一月 日

清野謙次

羽田亨殿

これによって、清野謙次の所蔵敦煌寫本がすべて羽田亨に譲渡されたことを確認できる。その価格は8500圓、相當な金額である。ただ不可解なのは、清野がそれぞれの經卷に附した金額を合算すると6873圓にしかないという点である。総額8500圓は、上の領收書の寫しに明記されている上、羽田目にも餘白に鉛筆で8,500と書かれてあることから間違いがない。ちなみにこの數字は羽田の筆跡である。ではなぜこの齟齬が生じたか。思うに清野の記録に書き込まれた個々の金額は、自身による見込みであったか業者に依頼しての査定額であったかはともかく、清野側の提示額の基礎となる數字であった。羽田はそれをかなり上回る金額で引き取ったということになる。普通の取引としては考えにくい。推測を逞しくすれば、その前年に京都大學を辭職して幽居中の友人に對する心遣いが働いたということは十分に考えられる。譲渡の約束は10月27日であるが、領收書は11月の日付である。羽田はその間に資金提供者と細かに折衝したであろう。

清野謙次舊藏の敦煌寫本が全部で40種あり、これまで知られていた数よりかなり多いこと、それら全部が昭和14年に羽田亨に譲渡されたことがこれで明らかとなった。極めて遺憾なことは、これらが同じく羽田のイニシアティヴによって日本に齎された李盛鐸舊藏寫本一括432點とともに、大戰末期資金提供者のもとに送られたまま、今日なお未公開であるという事実である。一日も早い公開が待たれる。

(注1) 1962年5月、北京、商務印書館刊、1983年6月、北京、中華書局重印。

(注2) ちなみに敦煌研究院編の『新編』(2000年7月、北京、中華書局刊)では「散録」がなくなっているの
で、元版を見る必要がある。

(注3) その通番1076~1094。

(注4) 通し番號を新たに附した以外は、基本的に極めて忠實な移録であるが、最後の1094「仙名經第五」はもちろん「佛名經」の誤寫である。

(注5) この手控えに關しては、落合俊典「羽田亨著『敦煌秘笈目録』簡介」(『敦煌文獻論集』、遼寧人民出版社、2001年)を参照。また羽田の敦煌寫本蒐集については

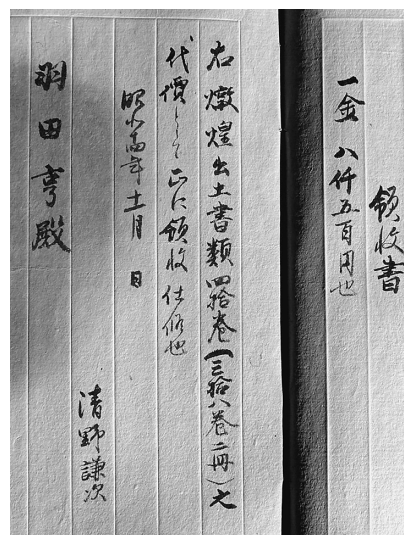


図2:「領收書」(写し)

拙文「明治四十三年(1911)京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第7卷(2004年)を参照されたい。

(注6) 羽田目に含まれるものには、羽田の手で若干の訂正や注記が施されているが、この番號は十三を十二に、五番目の十二を十三に入れ替えている。ちなみにそもそもこの番號が一體何であるのかが不明である。推測するに、清野がその入手した古寫本全部に順次通し番號を附して、賣却に際して敦煌寫本だけを抜き出したため、このような不連續な數字になったものだろうか。

(注7) 涅槃を涅槃と書き、また波羅蜜を波羅密とするような誤字があるが、清野の書癖として今はすべて訂正せず、元のままとした。

(注8) この二卷、羽田の注記によれば卷四及び卷十六である。ちなみにこれは清野「佛名經書寫由來記」(昭和11年1月14日記)でも確認される。ただし『昭和法寶目録』及び『敦煌遺書總目索引』「散録」では卷第十六とのみあるから、卷第四は、1929年以降に入手したものである。

(注9) 『昭和法寶目録』及び『敦煌遺書總目索引』「散録」では卷三十九とするものがこれに當たるか。存疑。

(注10) 『昭和法寶目録』及び『敦煌遺書總目索引』「散録」に見える「大般涅槃經卷第三十七」がこれに當たるか。存疑。

Chinese Characters
and Culture



発行日 2006年11月30日
発行者 文部科学省21世紀 COE プログラム
「東アジアにおける人文情報学研究教育拠点—漢字文化の全き継承と発展のために—」
住 所 〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47 京都大学人文科学研究所
電 話 075-753-6997 FAX 075-753-6999
e-mail coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

